

1 自己評価及び外部評価結果

(ユニット名:グループホームやまなみ)

事業所番号	0692500051		
法人名	特定非営利法人やまなみ		
事業所名	グループホームやまなみ		
所在地	山形県最上郡最上町向町5-10		
自己評価作成日	平成25年10月20日	開設年月日	平成22年11月1日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

1. 隔月の運営推進会議の議題と資料の準備をしっかりと、充実した討論を保障すること。
2. 地域住民との交流、GHへのひんぱんな訪問を重視している。(最上祭り、いも煮会、コスモスマつり)等で外に、年3回のミニコンサート(ひなまつり、七夕、クリスマス)開催で内に呼ぶ。
3. 介護の質の向上、充実をめざす。旺盛な職員研修に力を入れている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで検索し、閲覧してください。(↓このURLをクリック)
(公表の調査月の関係で、基本情報が公表されていないこともあります。御了承ください。)

基本情報リンク先 <http://www.kaigokensaku.jp/06/index.php>

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 エール・フォーユー		
所在地	山形県山形市小白川町二丁目3-31		
訪問調査日	平成 25年 12月 12日	評価結果決定日	平成 25年 12月 27日

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設3年目の当事業所は、理念を軸にしたサービスの提供、介護の質を高める毎月の職員研修(テーマを決め学習)、また地域との内外の交流(音楽コンサートや芋煮会への参加など)やNPO法人共同での震災復興支援活動(子供たちのキャンプ)など、やまなみの努力の成果や活動は多岐にわたっています。その中で日頃から職員たちは意欲をもって自己研鑽を積み、利用者の伝えたい思いの把握に努め、家庭と同じような暮らしが送れるよう支援しています。すべての活動からの学びを利用者のサービスに繋がるよう努力を続け、これからも質の高いグループホーム作りに頑張っている事業所です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

山形県地域密着型サービス「1 自己評価及び外部評価(結果)」 2013年度 ※複数ユニットがある場合、外部評価結果は1ユニット目の評価結果票にのみ記載します

自己 外部	項目	自己評価		外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	助け合いながら、チームワークで実践に努力している。	「家庭に近い環境での生活を大切にしたい」という想いを理念に掲げ、一人ひとりの気持ちに寄り添い支援している。職員は利用者のその時の気持ちを把握し、一緒にコミュニケーションをとりながら、理念の共有を図っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域のいも煮会や、お祭り、コンサートに参加し、できる限り、地域との交流を深めている。	日頃から事業所の見学や利用者へ家族等の面会、近所の方からの差し入れなどがある。地域の行事を通して、子供たちの神輿や鼓笛隊、ブラスバンドなど敷地内で演奏してもらうなど楽しいひと時がみられ、様々な交流の場が設けられている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	2ヶ月に1回発行の会報で、GHの生活の様子や行事、活動を地域に発信している。「地域包括ケアシステム」とは何かの連載を通じて、町民への啓発を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回開催している。自己・第3者評価の結果は、資料として会議に出し、話し合いを行っている。毎月職員学習会のテーマを、推進会議でも同じテーマで学習したり、「地域包括ケアシステム」をテーマにして討論している。	一緒に勉強していこうという気持ちで開催している。最近の議題では事業状況の情報公開を行い多くの意見や提案が出され、メンバーから理解と配慮を得て利用者へのサービスの改善に繋げている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	町の健康福祉課に、職員分の会報を毎回とどけて、GHの生活の様子を知らせている。運営推進会議に地域包括支援センター長が出席している。	2か月に1回、管理者の集まるサービス機関連絡会議にて様々な情報の共有をしている。介護相談に来る方達の課題解決に向けた市町村との連携や事業所のネットワーク作り、勉強会などにも力を入れ取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、環境や利用者の状態を考慮しながら、玄関に鍵をかけない工夫や、身体拘束をしないで過ごせるような工夫に取り組んでいる	身体拘束はしていない。手がよく動く方には人形を持たせ、落ち着いてもらったりしている。利用者が外に出たい時は、付き添い、一緒に過ごしている。	身体的(暴力や虐待)、精神的(言葉など)拘束は行わないと理念に掲げ、職員はそれらを理解し目配り・気づき・見守りなどを利用者一人ひとりに合わせた配慮に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事業所では、高齢者介護の歴史、人権擁護の歴史、人権の大切さを学習している。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度については、職員間で学習しているが、制度全体の学習は、これから実施して行きたい。書籍や資料は、事務所に備えてあるので、いつでも職員は見られる状態にある。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所契約時、契約事項をすべて読み上げて、十分な説明を行い契約している。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎月、利用者の生活の様子を、写真入りで家族に「たより」としてとどけている。家族の来所の折に、要望や意見に相談に応じている。	家族等からの相談事などは、面会やモニタリング時などで話せる機会を作りサービスの質の向上に繋げている。毎月、送付しているたよりから直近の様子などがわかり、家族等にとても喜ばれている。		
11		○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月10日の職員ミーティングは、学習の場であり、入居者のケアカンファレンスの場であり、職員の意見発表の場にしてている。情報の共有に努めている。			
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、ほぼ毎日、GHを訪ね、入居者・職員と交流している。勤務状況の把握につとめ、労働条件向上に努めている。			
13	(7)	○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	月1回の職員ミーティング時の学習は、テーマを設けて、3年近く開いている。テーマがよい研修会があれば参加させている。外との交換研修にも参加している。	職員のスキルに合わせた研修へ参加し研鑽を積み、知識や技術を習得しそれらの学びに関わりに反映させている。また、普段から言葉遣いやなにげない気遣いができるよう努力し、質の高い事業所作りに力を入れている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
14	(8)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	最上地域GH連絡会(2ヶ月に1回)の集まりを重視し、地域のネットワークづくりに努力している。県内の交換研修にも参加させている。宮城県大崎市のGHとの交流は3年続いている。	他のグループホームとの交流する機会を通して、利用者同士の交流や関わりの気づき、情報交換など成果がみられ、事業所間の協同により質向上に取り組み、互いの相乗効果に期待している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人が安心して生活できるように要望や訴えに理解、対応できるよう努めている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前に、ホームに見学に来てもらい、家族に安心してもらえるよう説明し、努力している。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所してしばらくは個人記録をいつもよりくわしく書き、職員全員で、利用者をよく観察し、サービスにつなげている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	なるべく洗濯物干し、たたみ、料理の手伝い等々、利用者ができることをしていただきながら、コミュニケーションを深めている。			
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族になるべく多く面会に来てもらえるように、介護計画の中に取り入れれたり、家族といっしょに支え合う関係づくりに努めている。			
20		○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者の友人、ご近所だった方、知人等にホームをひんぱんに訪問してもらおうようにしている。その際、昼食などいっしょに食べていただいている。野菜などどけてくれる人が後をたたない。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ひとつのテーブルに集まってもらい、会話のキッカケを作ったり、安心できるような雰囲気づくりを心がけている。“魚釣り”“ボール投げ”などは連帯を作り、孤立化を防いでいる。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	昨年10月にはじめて退所者(男性)が出たが、面会に行ったところ、本人もうれしそうにしていた。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ホームで購読している新聞以外に、2人の利用者が新聞をとっている。コーヒーの好きな利用者が2人いる。など、1人1人の生活条件に合わせて	利用者の行動や会話などから何を伝えたいのか推しはかり、出来るだけ意向に沿うよう心掛けている。音楽が好き、歌を歌いたい、読みものが好きなど、生活の中から発見し、傍に寄り添い把握に努めている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	以前のサービス提供者や医療機関からの情報と家族からの情報提供等を職員全体が共有して、ケアカンファレンスを通じて学んでいる。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の健康チェック、トイレチェック、水分摂取等、見守りしながら把握に努めている。その人らしい過ごし方を見守り、援助している。無理やり画一的な過ごし方を押しつけない。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎朝のミーティングや毎月のケアカンファレンスで個々の利用者ごとに課題を出し合い、介護計画に反映させている。	普段の会話や生活の中から思いや意向を把握し、利用者が穏やかな暮らしを継続できるよう状態の変化や要望に合わせて見直ししている。家族等との交流や安心して生活できるようなことも考慮した介護計画を作成している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎朝の申し送り、ホワイトボードに連絡事項を記入して伝えたり、日誌に記録して情報を共有している。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 (小規模多機能型居宅介護事業所のみ記載) 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる				
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地元の町会から、いも煮会のおさそい、温泉地で開催された、ひなまつりへのおさそい。町の文化祭、コンサート等々、ホームへの地域からの働きかけが多く、いっしょに参加して、生活を楽しんでいる。ホームでは、年3回のコンサート(ひなまつり、七夕、クリスマス)に地域の方々を招待して、楽しんでいる。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、かかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の受診は家族の同意を得ている。家族の付き添いを原則にしているが、できない場合は、職員が同行している。	利用者は家族等と共に馴染みのかかりつけ医を受診している。症状などメモにして医師へ情報提供し、家族等とは口答で連絡し共有している。予防注射等も通院時に受けるよう依頼している。		
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	夜勤者からの引き継ぎ、申し送りのミーティングに、看護職に週2回出席していただき、心配なことや、ケアについてアドバイスをいただいている。看護師がいることで安心して仕事ができる。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、入院治療が必要な可能性が生じた場合は、協力医療機関を含めた病院関係者との関係づくりを行っている。	サマリを利用して、医療機関との情報共有に努め、入退院時、入院中の対応を万全にしている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、医療関係者等と共にチームで支援に取り組んでいる	現在要介護5が1人、4が4人、3が2人と急速に重度化してきている。重度化に対応した職員研修に努めている。入居者の入院回数も増えている。家族とのいっそうの話し合い、医療との連携、職員の研修が課題となっている。	家族等とは、利用者の状態を見て話し合いを持ち、事業所に看護師が常勤でないことや医師の往診も望めないなど出来る事の範囲を説明し家族等の理解を得て、特別養護老人施設等の申し込みをしてもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定期的に人口呼吸やAEDの訓練を行っている			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	今秋(10/28)より、夜間(夜勤1人)の火災、災害を想定した防災避難訓練を実施した。全職員、法人全理事、運営推進委員、ご近所(6軒)の参加で、今までより規模を大きくして、緊張感のある訓練を実施した。	夜間想定訓練は、利用者には部屋に待機してもらい、近隣の方々の参加も得て、いつもより大規模になったが無事終了している。参加者に歩行状態などを伝えていなかった反省点もあり、学びも多くこの経験を土台に夜間マニュアルを作り実りの多いものになっている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	この課題に対応するため、神奈川県から講師を呼んで学習会をした。その内容は3回に渡って会報に掲載し、広く内外にアピールしている。職員研修で日々精進して行きたい。	「自分の事を見てもらいたい」という利用者の気持ちを受け止め、話にはうなずき、一人ひとり合わせるようにして、また会話の中から持っている能力を引き出せるよう関わっている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者とよく会話をして、入居者の思いを理解できるよう努めている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴などは、ホームの都合に合わせて(午前中)いただいているが、その他の日常の過ごし方は、入居者個々の要望に合わせて過ごしてもらっている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	この対応も、36番同様の学習会で職員集団の感性をみがぐことの大切さを学んで、実践している。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	この課題の大切さを職員もよく理解している。味付けや作り方を入居者に聞いたり、皮むきや豆もぎなどをしてもらったり、季節の物を献立にとり入れている。	食べる事を楽しみにしている利用者を使い、手作りのものを並べ、生協や産直を利用して食材にもこだわっている。誕生日はうなぎとケーキでお祝いするなど行事食や外食もうれしい事のひとつになっている。牛乳、ヨーグルトは毎日食してもらうなど健康管理にも配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	主食、副食、水分量、おやつなどの量を記録している。入居者の状況に応じてキザミ食やミキサー食も提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人ひとりの状態に応じた口腔ケアをしている。声かけ、見守り、介助で対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	入居者の状態に合わせて、声かけ、トイレ誘導、オムツ交換をしている。(1人1人のトイレ表を作成し、状態を把握している)	トイレには移動式の立ち上がり用手すりが置かれ、利用者と職員双方に使いやすい工夫がされている。一人ひとりの様子を見ての声かけ、おむつの方は時間で誘うなど配慮しながら介助している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳、ヨーグルトなどの乳製品を毎日摂取し、野菜、いも類など、バランスのよい食事づくりに心がけている。水分摂取も十分にしている。牛乳の嫌いな人には、声をかけて飲んでもらっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、事業所の都合だけで曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入居者に応じて(重度化に応じて)シャワー浴、足浴、入浴の介助を行っている。入浴時間は午前中(日勤と遅番の連携)個々の入浴希望に応じるのは仲々難しい。	浴室には薄いスベリ止めマットやシャワーキャリーを使い、顔色、咳、鼻など身体面も気をつけ入浴介助している。拒否の強い方には言葉掛けに工夫し足浴など誘うこともある。寒い日の柚湯も好評である。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室温調整をしたり、声かけて、よく眠れるように努力している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬については、ファイルがあり、職員が目を通すようになっている。服薬まで3回確認し服薬している。誤薬をしないように気をつけている。服薬の拒否がある場合は、少し時間をおいて飲んでもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	午後から、体操をしたり、オヤツ作りをしたり、外気浴をしながら過ごしている。歌を唄ったり、CDを聞いたり、誕生会にはキーボードをひいたりしてもらっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ホームの回りやテラスなどに職員が付き添って出してもらっている。ドライブ、コンサート、花見、紅葉狩り、外食等にでかけている。NPO会員の協力を得て、出かけられるようなシステムを作りたい。	墓参りや親戚を訪ねるなど希望で出かけたり、隣県の交流のある施設を車で訪ね一緒に過ごすなど出かける事も多い。これからの時期はミニコンサート、クリスマス会、琴の会など予定されボール遊びや輪投げ、体操などで体を動かし寒い冬を乗り切れるよう支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	今期の目標として何人かの入居者にお金の所持と使える工夫を試みたが、十分ではなかった。今は家族や職員と一緒に買い物に出かけている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者からの要望・相談があれば電話をしたり、手紙を出す援助をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関、廊下、居間に癒しになるような絵や写真をかけている。居間には、九州のNPOから送られた“つるし飾り”等を下げている。テーブルには季節感を感じさせる花等も生けている。居間から眺める景色は四季折々に楽しませてくれる。	館内には、地域の画家の絵などが四季折々に掛け替えられ利用者に潤いを与えている。リビングは過ごしやすさを第一に考え、ソファに座ると庭の中を走っているような電車の通る景色が、ゆったりと眺められる。雪囲いもギリギリまで組まずに外が見えるようにしておく気遣いがみられる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ほとんど、リビングで過ごしているが、自室に行ったり、ソファに横になったりして過ごしている。一つのテーブルに気の合う仲間が集まり、洗濯物の折りたたみなどを行っている場は何ともほほえましい。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅から持参した、ダンス、机、イス等を使用し、家族の写真や絵を飾ったり、仏壇ももって来ている人もいる。人形なども飾っている人もいる。季節が変わると家族が衣類などを変えてくれる。	家で使っていた物を持ち込み、同じような暮らしが出来るように設えている。夜間不穏になる時などは、人形をそばに置いたり隣に座って落ち着くのを待つなどの対応をしている。センサーやポータブルトイレの使用もあり、清掃は職員が行い清潔さを保っている。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	昨年、ベットは全て、介護用ベットにし、手摺りをつけた。廊下、居間の角のある箇所にラバーを張った。危険箇所を把握し改善して、安全で安心した生活を送れるよう工夫している。			